

提言第11号 肝生検に係る死亡事例の分析

事例2

< 事例概要 >

- ・ 70 歳代の患者、PS^{※1}1。死亡時画像診断（Ai） 有、解剖有。
- ・ 主診療科、肝生検施行診療科：消化器内科。
- ・ 血小板11.4 万/ μ L、PT 時間 15 秒、PT 活性65.3%、フィブリノゲン・フィブリン分解産物（FDP）3.4 μ g/mL。
- ・ 悪性リンパ腫疑いのため、腹部超音波ガイド下で肝生検が実施された。
- ・ 肝生検終了時に腹部違和感、嘔気を訴えて制吐薬が点滴投与されたが嘔吐し、嘔気が持続した。約 2 時間後、腹部膨満感を訴え、血圧低下、頻脈となった。その後、意識レベルが低下、血液検査の結果から腹腔内出血が疑われ、約 18 時間後に死亡した。
- ・ 生検組織診断の結果は、血管肉腫であった。

※1 PS（performance status）： ECOG（Eastern Cooperative Oncology Group）が定めた全身状態の指標で、患者の日常生活の制限の程度を示す